

ダビデ、アブシャロムのために嘆く

(II サムエル記18:23-24)『しかしどんなことがあっても、走って行きたいのです。』ヨアブは『走って行きなさい』と言った。アヒマアツは低地への道を走って行き、クシュ人を追い越した。ダビデは二つの門の間にすわっていた。見張りが城壁の門の屋根に上り、目を上げて見ていると、ただひとりで走って来る男がいた。』

さて、これは、神さまのみことばの中でもっとも感動的な場面のひとつです。ダビデは町の門のところに座って、やきもきしながら知らせが来るのを待っています。

(II サムエル記18:25-29)『見張りが王に大声で告げると、王は言った。『ただひとりなら、吉報だろう。』その者がしだいに近づいて来たとき、見張りは、もうひとりの男が走って来るのを見た。見張りは門衛に叫んで言った。『ひとりで走って来る男がいます。』すると王は言った。『それも吉報を持って来ているのだ。』見張りは言った。『先に走っているのは、どうやらツアドクの子アヒマアツのように見えます。』王は言った。『あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう。』アヒマアツは大声で王に『ごきげんはいかがですか』と言って、地にひれ伏して、王に礼をした。彼は言った。『あなたの神、【主】がほめたたえられますように。主は、王さまに手向かった者どもを、引き渡してくださいました。』王が、『若者アブシャロムは無事か』と聞くと、アヒマアツは答えた。『ヨアブが王の家来のこのしもべを遣わすとき、私は、何か大騒ぎの起こるのを見ましたが、何があったのか知りません。』』

ダビデは、アヒマアツにただひとつの質問しかありません。

「若者アブシャロムは無事か？」

でも、アヒマアツは王に知らせるのに必要なすべての情報を持っていませんでした。彼はアブシャロムが死んだかどうか、知らなかったのです。そして、今日、多くの使者が、神さまが人類に全ては良いとおっしゃっている、と告げながら走り回っています。でも、全てが良いわけでは“ない”のです。人間は罪人です。人間には救い主が必要です。神さまの御子が自分のために十字架にかかって死んでくださったのだと知る必要があります。生まれ変わる必要があります。アヒマアツはダビデが受け取るべきメッセージを持っていませんでした。

(II サムエル記18:31)『するとクシュ人が入って来て言った。『王さまにお知らせいたします。【主】は、きょう、あなたに立ち向かうすべての者の手から、あなたを救って、あなたのために正しいさばきをされました。』』アブシャロムに関する、ダビデの最初の質問に注目してください。彼のおもな関心は、だれが戦いに勝ったかではなく、アブシャロムが無事かどうかでした。

(II サムエル記18:32)『王はクシュ人に言った。『若者アブシャロムは無事か。』クシュ人は答えた。『王さまの敵、あなたに立ち向かって害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりますように。』』クシュ人は、正しい情報を持っています。彼は穏やかにアブシャロムが死んだことをダビデに告げています。そのあと、自分の息子のためのダビデの嘆きが続きます。これは聖書の中でも、またほかのどんな文学の中でももっとも心を動かす嘆きの表現です。この時点で、
「主よ。もうダビデの罪のために、あなたは十分に彼をこらしめられたではありませんか」と言いたい気がするでしょう。

(II サムエル記18:33)『すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。『わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。』』

19章

テーマ:ダビデ、王座に戻る。

ヨアブ、ダビデをたしなめる

アブシャロムの死の知らせにダビデは本当に心を痛めました。彼は息子に対して優しい愛を抱いており、若者が死んだとき、ダビデはひどく嘆きました。なぜでしょう？いくつかの理由があります。まず第一に、ダビデはアブシャロムの救いについて確信がなかったのだと思います。

バテ・シェバによるダビデの最初の息子が生まれたとき、この子はひどく病気になるって、ダビデがこの子のために断食して祈ったことを覚えておられるでしょう。ダビデが、この赤ん坊が死んだと聞いたとき、彼は立ち上がり、からだを洗って神さまを礼拝するために神の家に行き、そして食事をしました。彼のしもべたちは、ダビデの行動が理解できませんでした。彼はしもべたちに、はっきりと次のように言いました。「私はあの子のところに行くだろうが、あの子は私のところに戻っては来ない。でも、あの子のところに行くときにはすばらしい日になるだろう。」(訳注:最後の一文は聖書の本文にはありません。最初の文は II サムエル記 12:23 の後半です。)

彼は赤ん坊がどこにいるか知っていました。

でも、アブシャロムが死んだとき、ダビデの心は張り裂けそうでした。なぜでしょう？彼はこの若者の救いについて確信がなかったのです。自分の息子が霊的にどこにいるか、彼には分かりませんでした。率直に言って、私はダビデが、自分の息子は救われていなかったと感じていたのではないかと考えています。だから、彼はあんなにも嘆いたのです。同時に、ダビデは偉大な王ではありましたが、貧弱な父親でした。ダビデはそのことを実感したのだと思います。ダビデは一度もそうであるべき父親として本当に成功していません。そしてアブシャロムはこの失敗の証拠です。

ダビデはまた、自分が犯した罪のためにこの問題が起こったということを実感していました。神さまは、彼の罪のために、争いはダビデの家を離れることはないと言われたのです。そのとおりのことが起こり、アブシャロムの死のときから、ダビデは悲嘆に沈んだ人物になったと私は思うのです。彼の嘆きの一部は落胆のせいでしょう。ダビデは、アブシャロムが自分の王位を継ぐことを本当に望んでいました。彼はアブシャロムが自分に対して謀反を起こすという考えは好きではありませんでしたが、彼に次の王になってもらいたかったのです。

ダビデの嘆きがひどいものだったので、ヨアブでさえも心配してそのためにダビデを叱責します。

(II サムエル記 19:1-2)「そうこうするうちに、ヨアブに、『今、王は泣いて、アブシャロムのために、喪に服しておられる』という報告がされた。それで、この日の勝利は、すべての民の嘆きとなった。この日、民が、王がその子のために悲しんでいる、ということを知ったからである。」

その日は、偉大な勝利の日、喜びの日となってしまうべきでした。なぜなら、敵は打ち負かされたのですから。ところが、ダビデにとってはまったく勝利ではありませんでした。その代わりに、ことばで言い表せない嘆きと悲しみのときでした。

(II サムエル記 19:3)「民はその日、まるで戦場から逃げて恥じている民がこっそり帰るように、町にこっそり帰って来た。」

ダビデの軍隊は戦いに勝利をおさめたのですから、喜んでいるべきでした。その代わり、彼らは勝利のあと戦場から去り、まるで自分たちが敗北したかのようにエルサレムに引き上げて来ました。なぜでしょう？なぜなら、アブシャロムが殺され、そのことがダビデの心を引き裂いたからです。

(II サムエル記 19:4)「王は顔をおおい、大声で、『わが子アブシャロム。アブシャロムよ。わが子よ。わが子よ』と叫んでいた。」

ああ、なんとダビデはこの若者を愛していたことでしょう！なんと心優しい表現でしょう。ダビデはまったくおそまつな父親でした。彼はものごとの取り扱いがあまりにも下手でした。でも、彼は自分の息子を愛し、彼の死で心は張り裂けそうでした。

さて、ヨアブはアブシャロムの死に責任がありました。自分の息子がどのように死んだかをダビデが本当に飲み込むことができたかどうか。私は良く分かりません。きっとどのようにしてアブシャロムが死んだかという話をいくつも聞いたことと思いますが、ダビデはおそらく、あまり突き詰めたくなかったのでしょう。

(II サムエル記19:5-6)「ヨアブは王の家に行き、王に言った。『あなたは、きょう、あなたのいのちと、あなたの息子、娘たちのいのち、それに、あなたの妻やそばめたちのいのちを救ったあなたの家来たち全部に、きょう、恥をかかせました。あなたは、あなたを憎む者を愛し、あなたを愛する者を憎まれるからです。あなたは、きょう、隊長たちも家来たちも、あなたにとっては取るに足りないことを明らかにされました。今、私は知りました。もしアブシャロムが生き、われわれがみな、きょう死んだのなら、あなたの目にかなったでしょう。』」

もちろん、ヨアブはこの状況を反対の極端に持っていつてはいますが、確かにダビデはアブシャロムが死ぬよりも、ほかのだれかが死ぬことを望んだことでしょう。それはかなりはっきりしています。ヨアブはダビデをたしなめます。なぜなら、彼は自分の敵となって機会があったならきっとダビデを殺していた自分の息子の死を、あまりにも嘆いていたからです。

ダビデ、王座に戻る

(II サムエル記19:8)「それで、王は立って、門のところにすわった。人々がすべての民に、『見よ。王は門のところにすわっておられる』と知らせたので、すべての民は、王の前にやって来た。一方、イスラエル人は、おのおの自分たちの天幕に逃げ帰っていた。」

民には今、再起のきっかけが必要でした。すべての人が落胆していました。状況は悪くなっていました。謀反を率いていた人物は殺されましたが、喜ぶ代わりに、民はダビデが今までに示したうちでもっとも大きな嘆きを目撃したのです。でも、ヨアブが王に話したあと、自分の部下たちに彼らの自分に対する忠誠を深く感謝していると知らせるために、ダビデは門のところに行きました。

(II サムエル記19:9-10)「民はみな、イスラエルの全部族の間で、こう言って争っていた。『王は敵の手から、われわれを救い出してくださった。王はわれわれをペリシテ人の手から助け出してくださった。ところが今、王はアブシャロムのために国外に逃げておられる。われわれが油をそそいで王としたアブシャロムは、戦いで死んでしまった。それなのに、あなたがたは今、王を連れ戻すために、なぜ何もしないでいるのか。』」何が起こったかという、アブシャロムの側についた者たちは、今彼が死んでしまったので、どうしたら良いか分からなかったのです。彼らは、王を連れ戻すのが一番の得策だと決定しました。

(II サムエル記19:11)「ダビデ王は祭司ツァドクとエブヤタルに人をやって言わせた。『ユダの長老たちにこう言って告げなさい。『全イスラエルの言っていることが、ここの家にいる王の耳に届いたのに、あなたがたは、なぜ王をその王宮に連れ戻すのをためらっているのか。』』」

見たところ、ユダ部族の中にさえも、アブシャロム側に寝返った多くの人々がいたようです。今度はダビデが彼らの行動をたしなめます。

(II サムエル記19:12-14)「『あなたがたは、私の兄弟、私の骨肉だ。それなのに、なぜ王を連れ戻すのをためらっているのか。』またアマサにも言わなければならない。『あなたは、私の骨肉ではないか。もしあなたが、ヨアブに代わってこれからいつまでも、私の將軍にならないなら、神がこの私を幾重にも罰せられるように。』」こうしてダビデは、すべてのユダの人々を、あたかもひとりの人の心のように自分になびかせた。ユダの人々は王のもとに人をやって、『あなたも、あなたの家来たちもみな、お帰りください』と言った。」全員そろって、ダビデを王座に戻したいという願いがありました。

(II サムエル記19:15-17)「そこで王は帰途につき、ヨルダン川に着くと、ユダの人々は、王を迎えてヨルダン川を渡らせるためにギルガルに来た。パフリムの出のベニヤミン人、ゲラの子シムイは、ダビデ王を迎えようと、急いでユダの人々と一しょに下って来た。彼は千人のベニヤミン人を連れていた。サウルの家のしもべツィバも、十五人の息子、二十人の召使いを連れて、王が渡る前にヨルダン川に駆けつけた。」シムイは、ダビデが出て行くときに彼をのろったのです。今彼は、王を迎える最初の人物になろうとしています。

(II サムエル記19:18-21)「そして彼は、王の家族を渡らせるために渡しを渡って行き、王が喜ぶことをした。ゲラの子シムイも、ヨルダン川を渡って行って、王の前に倒れ伏して、王に言った。『わが君。どうか私の咎を罰しないでください。王さまが、エルサレムから出て行かれた日に、このしもべが犯した咎を、思い出さないでください。王さま。心に留めないでください。このしもべは、自分の犯した罪を認めましたから、ご覧のとおり、きょう、ヨセフのすべての家に先立って、王さまを迎えに下ってまいりました。』ツェルヤの子アビシヤは口をはさんで言った。『シムイは、【主】に油そそがれた方をのろったので、そのために死に値するものではありませんか。』」

ダビデは寛大な人物でした。彼は人を赦すことのできる人でした。

(II サムエル記19:22)「しかしダビデは言った。『ツェルヤの子らよ。あれは私のことで、あなたがたには、かわりがないことだ。あなたがたは、きょう、私に敵対しようとでもするのか。きょう、イスラエルのうちで、人が殺されてよいだろうか。私が、きょう、イスラエルの王であることを、私が知らないともいうのか。』」
ダビデはこう言っています。

「なぜ私がこの者に注意を払わなければならないのか？私は自分がイスラエルの王であることを知っている。」

ダビデは、神さまが自分をこの地位に戻してくださったことで満足しています。

「なぜ私はシムイのようなつまらない者のことを心配しなければならないのか？なぜ彼を殺さなければならないのか？彼がどう思おうと、何の意味もないではないか。」

今日、小さなことを心配するクリスチャンが大ぜいいます。彼らは邪魔されるべきでない、つまらない人々に邪魔されます。神さまはあなたを祝福してくださっていますか？もしかしたら、あなたはがっかりしている牧師かも知れません。あなたは、役員会とトラブルがあるのですか？トラブルメーカーが問題を起こしているのですか？忘れてしまいなさい。あなたは神さまに仕えているのです。神さまがあなたの味方なのです。小さなイライラを乗り越えて、主に仕えてください。そのようにしていることを確認してください。ほかのことは忘れてください。私たちはそれらを乗り越える必要があるのです。

(II サムエル記19:23)「そして王はシムイに、『あなたを殺さない』と言って彼に誓った。」

ダビデのシムイに関する最終的な決定は、彼を罰することはしない、ということでした。事実、ダビデはこの男と何のかかわりを持つつもりもありませんでした。

(II サムエル記19:24)「サウルの孫メフィボシェテは、王を迎えに下って来た。彼は、王が出て行った日から無事に帰って来た日まで、自分の足の手入れもせず、ひげもそらず、着物も洗っていなかった。」

ダビデに深く感謝しているメフィボシェテは、謀反に加わることをしませんでした。彼はダビデに忠義を尽くし、この間ずっと断食して王のために祈っていました。彼のような友を持つのはすばらしいことだと思いますか？

(II サムエル記19:25-28)「彼が王を迎えにエルサレムから来たとき、王は彼に言った。『メフィボシェテよ。あなたはなぜ、私といっしょに来なかったのか。』彼は答えた。『王さま。私の家来が、私を欺いたのです。このしもべは「私のろばに鞍をつけ、それに乗って、王といっしょに行こう」と思ったのです。しもべは足のなえた者ですから。ところが彼は、このしもべのことを、王さまに中傷しました。しかし、王さまは、神の使いのような方です。あなたのお気に召すようにしてください。私の父の家の者はみな、王さまから見れば、死刑に当たる者に過ぎなかったのですが、あなたは、このしもべをあなたの食卓で食事をする者のうちに入れてくださいました。ですから、この私に、どうして重ねて王さまに訴える権利がありましょう。』」

メフィボシェテはダビデに言います。

「もし、私があなたを裏切ったと思われるなら、私を好きのようになしてください。私には、これ以上あなたからのご好意を得る資格はありませんから。」

(II サムエル記19:29-30)「王は彼に言った。『あなたはなぜ、自分の弁解をくり返しているのか。私は決めている。あなたとツィバとで、地所を分けなければならない。』メフィボシェテは王に言った。『王さまが無事に王宮に帰られて後なら、彼が全部でも取ってよいのです。』」

これは、メフィボシェテの誠意を証明していると私は感じます。

(II サムエル記19:31-32)「ギルアデ人バルジライは、ログリムから下って、ヨルダン川で王を見送るために、王といっしょにヨルダン川まで進んで来た。バルジライは非常に年をとって八十歳であった。彼は王がマハナウムにいた間、王を養っていた。彼は非常に富んでいたからである。」

ギルアデ人バルジライは、他の国の族長で、ダビデに対して気前が良く、謀反の間彼に食物を提供していた。今ダビデは、彼の気前の良さに対して報いることができるように、彼と一緒にエルサレムに帰って欲しいと願っていました。

(II サムエル記19:33-34)「王はバルジライに言った。『私といっしょに渡って行ってください。エルサレムで私のもとであなたを養いたいのです。』バルジライは王に言った。『王といっしょにエルサレムへ上って行っても、私はあと何年生きられるでしょう。』」

バルジライはダビデに言いました。

「私にはもうあと何年ありません。私はもう80歳です。私の日数は限られていることが分かっていますから、むしろ、家にとどまりたいのです。王宮に住まわせてくださるという王さまの寛大な申し出は感謝しますが、私はもう、そのようなことに気持ちをそそられることのない年齢に達しました。」

(II サムエル記19:35)「『私は今、八十歳です。私はもう善悪をわきまえることができません。しもべは食べる物も飲む物も味わうことができません。歌う男や女の声を聞くことさえできません。どうして、このうえ、しもべが王さまの重荷になれましょう。』」

バルジライは続けます。

「私は年寄りです。もう音楽を聴くこともできません。食べ物も昔のように味わうことはできません。私は、パーティーを台無しにはしたくありません。王さまの足を引っ張って楽しみを減退させたくないのです。」

(II サムエル記19:36)「『このしもべは、王とともにヨルダン川を渡って、ほんの少しだけまいりましょう。それ以上、王はどうして、そのような報酬を、この私にしてくださなければならないのでしょうか。』」

バルジライはダビデを助けた。なぜなら、彼はダビデが神の人だと知っていたからです。彼は王に信頼していました。彼がダビデを助けたのは、そういう動機からでした。

ダビデが自分の息子に対してもう少し寛大でなかったのは残念なことです。アブシャロムが罪を犯して帰ってきたとき、彼がこの若者を完全に赦してやっていたなら、ものごとは違っていたかも知れません。もし彼がアブシャロムを、放蕩息子を迎えた父親のように腕に抱き、着物を着せて子牛をほふって宴会を持っていたなら、ダビデはこのようないどい謀反が起こることを防げたのではないか、と私は思うのです。